足元から eco! ㊺

タンスのお金をエコに使おう!

小林 光
(慶應義塾大学大学院特任教授
工博・元環境事務次官
エコ・スーパービジョン代表)

フランス映画の「TOMORROW パーマネントライフを探して」の試写を見た。2時間の長編だが飽きさせない。世界各地(といっても英語かフランス語で直接会話できる範囲であってアジアではインドまでで、残念ながら日本は登場しない)の、地球との共生を目指す取組みを足元から行っている現場をルポルタージュしている。自分は、最近、共編著で「地球とつながる暮しのデザイン」(表紙は写真1のとおり。木楽舎刊。)を上梓した。これは生活者のエンパワーメントを目指したものなので、この映画のアプローチにとっても共感した。国内大都市では順次公開されるようなので鑑賞観覧していただければ、ご覧になる方の抱えている問題に応じ、それぞれの事例が大きなヒントをくれ、元気が湧いてくるに違いない。

(写真1)

いろいろな事例がドキュメントされるが、私自身が一番興味を惹かれたのは地域通貨・エコマネーの取組みである。映画では、イングランドの2つの事例(トットネス・ポンドとブリストル・ポンド)に加え、スイスのバーゼルで戦前から活動している金融の仕組みであって、企業の投資に利用できる補助通貨、ヴィール(WIR)がそれぞれインタビューを通じて紹介されている(ちなみに日本での実例には相模原の「萬」がある)。

つい先月(10月13、14日)、東京で、アジア初開催となるOECDのグリーン・インベストメント・ファイナンシング・フォーラム(GIFF)第3回会合が開かれた(ポスターは写真2のとおり)。私も2日間フルに出席し、オフレココ部分も含めて各発表を聞いた。そのどれもが、環境との共生を進める取組みに対しどのようにして資金を供給できるのか、を熱心かつ具体的に論じたものであった。緑をシンボルに選挙に圧勝して登場した小池東京都知事は、この会議と軌を一つに、グリーンボンドの発行方針を明らかにした。グリーンボンドとは、債券の一種であって、発行主体がその行う環境性能の高い事業に対して、その集めた資金を充当する仕組み(さらに、その充当過程や効果も公表される)の下に出されるものである。今やひっぱりだこで、海外での発行額はうなぎ登り。GIFFでも大いに議論された。

(写真2)

東京都も来年度から本格的にこの仕組みを都債に導入し、都の仕事の質を向上し、進め方を改革していくとして、今年は、その練習として小規模(100億円)に「東京環境サポーター債」を発行する由である(10月21日発表)。購入募集は11月下旬から開始のようであるが、エコなお金が大きく身近になったと言えよう。ちなみに、一万円札は巷では“1諭吉”などと数えられるが、我が慶應では“1諭吉先生”と呼ばれる。この大切な一万円札の市中流通量が今年度には前年比で6.9%も増えたそうだ。超低金利などを嫌ってタンス預金が増えているという。タンスに諭吉先生をしまうより、是非、持続可能な社会を作るために活躍させてあげてほしいものだ。